

新美南吉の少年時代における唱歌、童謡についての一考察

—日記及び創作ノートを手がかりに—

A Study of “Shoka” and “Douyou” sung by Nankichi Niimi in his Boyhood

—With the Clue of his Diaries and creative Notebooks—

加藤 希央

Kio Kato

〈摘要〉

児童文学者の新美南吉（1913-1943）が残した日記及び創作ノートの類には、西洋音楽に関する記述が散見される。それは文学を志し夭折した青年の、個人的音楽聴取の記録である。本稿では1923（大正12）年から1931（昭和6）年、すなわち南吉9歳から18歳の間に書かれた作文帳や日記及び創作ノートから、唱歌と童謡に関する記述を抽出し、南吉の少年時代におけるそれらの歌との関わりについて考察した。小学校時代に書かれた唱歌の歌詞を取り入れた作文には、南吉の文学活動の出発点である童謡創作へと繋がると考えられる書法がみられた。加えて当時大きな流行となっていた童謡について、南吉にとっての童謡とは付曲された音楽としての童謡ではなく、雑誌を媒体とする文芸であったことを示した。また南吉のわらべうた（伝承童謡）に関する記述には、北原白秋（1885-1942）からの多大な影響が見られるが、それらが書かれた時期は、南吉の文学的飛躍が準備されたと考えられる時期と重なっていた。そしてその直筆の一部には、南吉の音楽的な志向性が表れている可能性を提示した。南吉の唱歌と童謡に関する記述を辿ると、文学を愛好する少年から児童文学者へと成長していく過程が見られた。そして少年時代の南吉が、発声し歌うことを愛しんでいた様子がうかがわれた。

（キーワード） 新美南吉 唱歌 童謡 わらべうた

はじめに——新美南吉と音楽

児童文学者の新美南吉（本名・新美正八）は、1913（大正2）年、愛知県半田町（現・半

田市)岩滑に生まれた。幼少より文才を示し、14歳の頃から盛んに童話や童謡を書き始める。1931(昭和6)年、南吉18歳の年に書かれた「ごんぎつね」は、1956(昭和31)年に小学校4年生の国語教科書に採用されて以来、現在まで60年以上にわたり多くの教科書に掲載されてきた。教室でこの物語を読んだ子どもたちの数は、6千万人を超えるといわれる⁽¹⁾。しかし南吉は、自らの作品がこれほどに広まる未来を知ることなく、1943年(昭和18)年、咽頭結核のため29歳7か月でこの世を去った。

南吉は、旧制中学の学生であった1929(昭和4)年から、死の前年である1942(昭和17)年まで、数回の中絶及び日記原本が失われた部分を除き、その生涯をおおよそ追うことができる日記を残した。また小学校時代の作文帳や創作ノート等も残されている。それらを辿ると、小学校の学芸会で唱歌を歌ったことや、学生時代に蓄音機でベートーヴェンを聴いたことなど、南吉と西洋音楽との関わりを示す記述が散見される。南吉の残した文献にみられる音楽に関する記述とは、文学を志し夭折した青年の個人的音楽聴取の記録である。

南吉が少年時代を過ごした大正中期から昭和初期には、童謡の大流行があった。南吉も夢中になった童謡は、児童雑誌『赤い鳥』にて詩人・北原白秋(1885-1942)により創始された。その背景には、非芸術的との烙印を押された学校唱歌への批判があった。白秋は童謡の理想を、在来のわらべうた(伝承童謡)に置いた。しかしその誕生からまもなく、童謡は作曲家により付曲され楽譜を伴うようになる。音楽となった童謡は、ラジオやレコードという新しいメディアに乗り爆発的な流行を生んだ。

本稿の目的は、南吉の少年時代における唱歌や童謡及びわらべうたと、南吉との関わりについて、南吉の残した日記や創作ノートを手がかりとして明らかにすることである。またそれらの歌との関わりが、南吉の生涯においてどのような位置づけとなるのかを提示したい。

本稿では南吉の少年時代を、南吉自身による記録が残された小学校から中学校にいたる学童・学生期間と定め、その音楽体験から唱歌と童謡に関する記述を抽出し、考察を試みる。対象文献は、1922(大正11)年から1931(昭和6)年、すなわち南吉が9歳から18歳の間に書いた作文帳や日記及び創作ノートである『綴方帳』『昭和四年自由日記』『少年少女ダイアリー』『文藝自由日記』の4冊である。本文中の南吉による記述の引用は『校定新美南吉全集』(大日本図書)第10巻を基本とした。また『綴方帳』については南吉直筆の原本を、『文藝自由日記』内「ワタクシノドウエウ」は南吉の直筆を撮影したネガフィルムのプリントを併せて参照した。旧字体の使用については、書名及び引用文において旧字が用いられている場合はそれを使用し、本文では新字での記述とした。

I. 新美南吉と唱歌

この章ではまず唱歌について概観する。次に、南吉が小学校時代に書いた作文が残る『綴

方帳』から、唱歌の歌詞及び改変された歌詞の引用がみられる2つの作文を取り上げ、南吉と唱歌との関わりについて考察する。

1. 唱歌について

唱歌とは旧制小学校における教科の1つであり、またその教科において用いられる歌曲を指す。日本で最初の五線譜を用いた音楽教科書『小學唱歌集』全3冊は、文部省内音楽取調掛によって編集され、1882(明治15)年から順次刊行された。収められた唱歌の多くは、讚美歌や外国の民謡の旋律に日本語の歌詞が付けられたもので、『蝶々』『螢の光』など今なお歌い継がれている曲もある。その後『幼稚園唱歌』(1887)、『小學唱歌』全6冊(1892~1893)、『尋常小學唱歌』(1910)などが、官製あるいは準官製の唱歌集として刊行された。

当初、唱歌においては「徳性の涵養」「情操の陶冶」が目指され、歌詞には忠君愛国、国体や皇室及び英雄の讚美といった教訓的な内容が多く盛り込まれた。そのため、歌詞が難解で子どもには理解しがたいという批判の声があった。明治20年代には言文一致唱歌なども作られたが、大正に入ると子どものための新しい歌を望む気運は一層の高まりをみせた。1918(大正7)年創刊の児童雑誌『赤い鳥』主宰の鈴木三重吉(1882-1936)は、文部省が定めた学校唱歌を「非芸術的」と糾弾した。南吉も愛読した『赤い鳥』は正に新しい子どもの歌である童謡誕生の場となったが、その背景には学校唱歌への批判と対決姿勢があった。

新美南吉が小学校の唱歌の時間に使用した教科書は、南吉の在学期間から『尋常小學唱歌』と考えられる。これは1911(明治44)年から1914(大正3)年にかけて刊行された、歌詞も旋律も全て日本人によって作られた音楽教科書である。刊行以来、昭和初期まで20年近く使用され、その中には現在の学習指導要領で定められた歌唱共通教材まで引き継がれている歌もある。

2. 『綴方帳』に残る唱歌に関する記述

『綴方帳』は南吉の残した日記、ノートにおいて現存する最も初期のもので、南吉が小学校3、4年生(9~10歳)の頃に書いた「綴方」⁽²⁾のノートである。版型A5版、厚紙表紙でミシン中綴じ製本、青インクの罫線で枠が印刷された方眼で、1頁12行、1行17字、204字詰め仕様となっている。表紙に続き1頁12行、3段組みの目次頁がある。その右端の欄には上から「月日」「文題」「備考」の項目が印刷され、南吉の手で各事項が書き込まれている。書かれた文章の中には南吉自身が「他作」と記しているように、模範文の筆写も含まれている。南吉直筆の『綴方帳』原本を確認したところ、始めの頁からほぼ追い込みの状態を書き綴られ、方眼のマスに1つずつ丁寧に書かれた文字からも、南吉がノートを大切に使っていた様子がうかがわれた。

ここに収められた南吉の作文の中に、『尋常小學唱歌』に掲載の唱歌《蟲のこゑ》《春が来た》からの歌詞の引用と、南吉による歌詞の改変を取り入れたものが見られた。それらにつ

いて以下に考察する。南吉の作文のタイトルを鉤括弧、唱歌のタイトルを二重山括弧で示し、その全文を引用掲載する。南吉の文章における改行は『綴方帳』原本の通りとした。なお南吉の直筆では鉤括弧と文字が1マスに書かれていることや、踊り字(くの字点)が1マスに書かれていることから、原本では1行17字の用紙に収まっている。

(1) 「秋の虫」⁽³⁾——唱歌《蟲のこゑ》

秋の虫

夜道を歩くと虫が一しょうけん命にな
いてるあんなにないてもいいでせうか

「ちんちろちんちろ

ちんちろりん

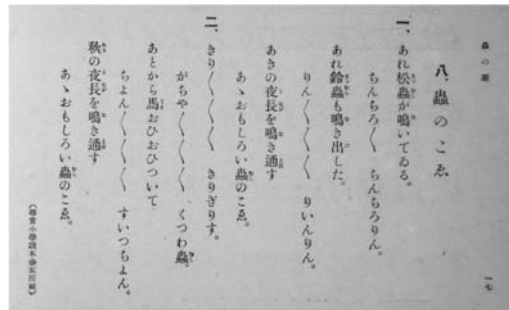
又なき出した

がちやがちや

がちかちやくつわむし

あちらでもこちらでもない涼しい
風がふいてきた「ああおもしろい虫の聲」
又虫がなき出した。りんりんりんりん鈴
虫だ。「あれあちらでないてゐるのはなん
でせう。きり／＼／＼／＼ないてゐる「あれはな
んでせう」「あれはこほろぎやです。「あれこ
ちらにないてゐるのはなんでせ。「はいあ
れですか「あれは馬追という虫でせうこ
んばんはよく虫がなきます。

図1:『尋常小學唱歌第三學年』《蟲の聲》歌詞



(愛知県図書館所蔵)

はじめに『綴方帳』原本における「秋の虫」の記述について解説する。『綴方帳』の目次にある「秋の虫」の日付は9月23日である。タイトルの上には赤インクで「優」の文字、さらに文中「こほろぎや」の「や」の文字に訂正の二重線、さらに「なんでせ。」の部分には「う」の文字が書き込まれている。『校定新美南吉全集』第10巻解説によれば、これらの指導は担任であった坂田聡香によって書かれたと推測されている。文中に鉤括弧で部分的に引用されている詩は、唱歌《蟲のこゑ》である。南吉の作文では《蟲のこゑ》の引用は本文より5字下がりで書き始められているが、途中から改行がなくなり、歌と南吉の文章が溶け合うような形に変化している。

唱歌《蟲のこゑ》は、1912(明治45)年刊行の『尋常小學唱歌第三學年用』の第8曲目に掲載された、二長調4分の2拍子の曲である。初出は『尋常小學讀本唱歌』(1910)で、作

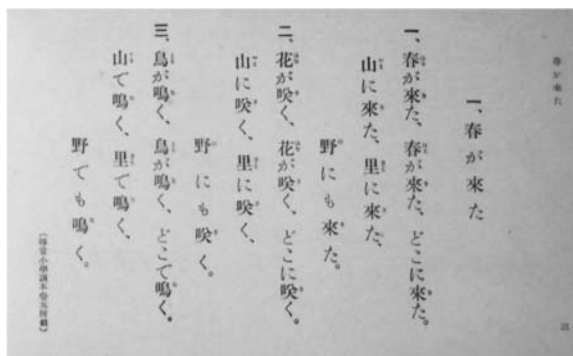
詞・作曲者は不明である。1998（平成 10）年告知の「小学校学習指導要領」において第 2 学年の歌唱共通教材となり、現在も引き続き音楽教科書に掲載されている。また 2007（平成 19）年には「日本の歌百選」にも選定された。

南吉の記述「あれはこほろぎやです」の「や」の部分について、現在も歌われている《虫のこえ》2 番の歌詞である「キリキリキリキリ こおろぎや」を、南吉が歌いながら書いたためではないかと筆者は考えていた。しかし南吉が使用した 1912（明治 45）年刊行の『尋常小學唱歌』におけるこの部分の歌詞は「きり／＼／＼／＼ きりぎりす」であった。歌詞の「きりぎりす」が「こお（ほ）ろぎや」に改訂されたのは 1932（昭和 7）年の『新訂尋常小學唱歌』においてである。改訂の理由は、「きりきり」がこおろぎの鳴き声を表現したものであることと、きりぎりすがこおろぎを指す古語であることから、虫の鳴き声と名前とを整合させるためであった。南吉は作文において、唱歌の時間に習ったはずの「きりぎりす」ではなく「こおろぎや」と書いた。その理由について推察を試みるに、南吉少年には「キリキリ」の鳴き声に直接結びつく「こおろぎ」の方が、古語であるきりぎりすよりも実感に近かったのではないだろうか。これは後に教科書の歌詞が改訂される理由とも繋がる。そして南吉の記述に見られる「こほろぎや」の「や」の文字は、元の歌詞である「きりぎりす」の 5 音に揃える形で付けられた可能性があり、やはり南吉は歌いつつ音読しつつこの作文を書いていた可能性がある。結果的に教科書改訂後の歌詞と同じになったのは偶然だとしても、少年時代の南吉にとっての歌うことと書くことの連係がうかがわれる記述である。

(2) 「冬が来た」——唱歌《春が来た》

冬が来た
 冬が来て寒くなりました。
 冬が来た
 冬が来た
 どこに来た
 どこに来た
 山に来た
 里に来た
 野にも来た
 先日もゆきがふつた
 寒い北風ふいて来た
 このはがどこからとなくとんできた。寒い寒い。秋ないてゐた虫ももう死んだでせう。もうへびやかへるは土穴にはいつて

図 2：『尋常小學唱歌第三學年』《春が来た》歌詞



(愛知県図書館所蔵)

るませう。あちらの櫻の木を見ると葉はもうちつてしまひました。櫻の木も寒むからう。寒い風に吹かれながらぼんやりと立つてゐます。今では葉はついてゐる木はないやうですが松の木を見るとまだ葉がついてゐるやうです「ひやあ寒い風が吹いて來た。」「やあ又先日ふつたやうなゆきがふつて來た。」寒むいなあ。「ゆきがつもればよいぢやないか。」「ほんたうだゆきふりはよいが少しのゆきはいやだ。」「なるほど少しのゆきはなにもならないが、たくさんゆきはおもしろくあそべる。」「いますぐにたくさんゆきがふつて來るとよいがなあ。」

図3：南吉直筆の「優」の文字
(丸枠内)



(新美南吉記念館所蔵)

『綴方帳』の目次によれば作文「冬が来た」の日付は12月8日、前述の「秋の虫」から約2か月半後に書かれている。原本には本文3、4行目上段欄外にピンク色の色鉛筆ないしクレヨンで書かれた「優」の字がみられる(図3)。『校定新美南吉全集』第10巻の解説によれば、南吉自身が書いたと思われる微笑ましい落書きである。文末の下余白部分には赤インクで「よく書けた。面白く先生はよみました。この分で行けば小説家ですよ」の評がある。南吉の子ども時代の文才を示す言葉としてしばしば取り上げられる記述であるが、担任であった坂田が10月に退職した後クラスを受け持った人物が不明のため、誰の手によるものかは判明してない。冒頭の「冬が来て寒くなりました」以降の7連は、唱歌《春が来た》1番の歌詞における「春」を「冬」に置き換え引用したと思われる。そして「先日ともゆきがふつた／寒い北風ふいて来た」以降から改行がなくなり、南吉自身の作文に繋がっていく形となっている。

唱歌《春が来た》は『尋常小學唱歌第三學年用』(1912)の第1曲目に掲載された、ハ長調4分の4拍子の曲である。この曲も《蟲のこゑ》と同じく『尋常小學讀本唱歌』より引き継がれての掲載で、現在小学校2年生の歌唱共通教材となっている点も同様である。さらに2007(平成19)年の日本の歌百選にも選出されている。ただしこちらは作詞・高野辰之(1867-1947)、作曲・岡野貞一(1878-1947)と作者が判明している。

この作文について考察する。まず唱歌の歌詞が改変されつつも引用され、南吉の作文へと繋がっていく形であることや、会話文が多用されている点に前述の作文「秋の虫」との類似がみられる。また文中の「秋ないてみた虫ももう死んだでせう」も、「秋の虫」との繋がりを思わせる。これらのことから、南吉は「秋の虫」と「冬が来た」の2つの作文を、唱歌を取り入れた連作のように考え綴った可能性が考えられる。

また南吉の本作文における唱歌の改変は、歌詞を「春」から「冬」に変えただけではない。歌詞では「どこに來た」が1回であるところを、「どこに來た／どこに來た」と2回繰り返す形にしている。これにより、音読した時のリズム感により良い弾みが生まれる。ささやかな工夫ではあるが、このように音節を整える書法は後の旺盛な童謡創作に繋がっていくものであるように思われる。

さらに、南吉は唱歌の歌詞を取り入れるにあたり改行や書き散らし方にも工夫をみせており、これは先述の作文「秋の虫」も同様である。唱歌教科書の歌詞の書き方や、雑誌等で目にする童謡の書き方を参考にした⁽⁴⁾とも考えられ、南吉の雑誌書籍等印刷媒体への愛着と憧れが感じられる。

3. 本章のまとめ——童謡創作へと繋がる書法

以上、南吉の小学校時代の作文帳である『綴方帳』における、唱歌の歌詞及びそれを改変したものが取り入れられた2つの作文について考察を試みた。『綴方帳』にはこの他にも、作文「がくげいくわい」にて唱歌《金剛石・水は器》の曲名、作文「私の學校」においては「二年生は唱か^マをうた。つてみます」のような唱歌の授業に関する記述などがみられた⁽⁵⁾。4年生の時に書かれた作文「秋の野」では、虫の鳴き声として「ちんちろりんちんちろりん」と唱歌《蟲のこゑ》の歌詞の一部を再び取り入れたと思われる記述もある。

このように作文の中でたびたび唱歌にふれていることから、少年時代の南吉が身近な自然を歌った唱歌に親しみを感じていたことがうかがわれる。学校唱歌は非芸術的との批判も社会には存在したが、南吉少年には好ましく楽しい歌であったようだ。のちにベートーヴェンなど西洋クラシック音楽を愛聴するようになる南吉であるが、音楽好きは子どもの頃からであったと思われる。

また筆者が目にするのは、南吉が音読しつつ文章のリズムを整えるように書いていたことをうかがわせる歌詞の改変である。これは彼の文学活動の出発点となる童謡創作へと続く、その準備段階の書法と見ることができるのではないだろうか。

II. 新美南吉と童謡

この章ではまず童謡について概観する。次に作曲された「音楽としての童謡」と南吉との関わりを、南吉の中学時代の日記である『昭和四年自由日記』の記述から探る。そして南吉が幼少期に歌ったわらべうた（伝承童謡）を列記した「ワタクシノドウエウ」を基に、南吉が北原白秋より受けた影響を明らかにする。さらにその中に1曲だけ記された唱歌《蝶々》について、南吉の直筆を検証し考察を試みる。

1. 童謡について

童謡とは 1918（大正 7）年に創刊された児童雑誌『赤い鳥』を嚆矢とする、文芸であり音楽である。「童謡」の語は『赤い鳥』以前から存在しており、上代には政治的風刺や事件の予言及び神意を遇した歌謡をさす「わざうた」、近世から明治大正にかけては子どもが遊びや行事の際に歌う「わらべうた」、また明治期には巷間に流行する歌謡「はやりうた」の意味もあった。『赤い鳥』の童謡とはこうした「童謡」の語が元々持っていた意味を部分的に流用しつつ、そこに芸術性という意味を盛り込んだ新語として標榜された⁶⁾。

北原白秋の主導により『赤い鳥』誌上に生まれた童謡は、広く人々の心を掴み、類似の児童雑誌が相次いで刊行される契機となった。こうした雑誌の人気を支えたのは、掲載される一流作家の作品の力だけではなく、毎月行われる読者の創作による童話や童謡の募集であった。応募入選作品には選者による評が付けられ、投稿する読者の熱はいやが上にも高まった。本稿の主人公である新美南吉も、そうした投稿少年のひとりであった。

留意すべきは『赤い鳥』創刊当時の童謡が、現在イメージされる「音楽」としての童謡ではなく、詩として提示される「文芸」としての童謡であったことである。しかし文芸でありつつ読み手の「声」を伴うところに特徴があった。『赤い鳥』通信欄に寄せられた投書からは、詩として掲載された童謡を、その名の「謡」の字が示す通り、読者が各々自由に節を付けて歌ったり、読み聞かせたりしていた様子が伝わる。『赤い鳥』創刊号に掲載された白秋の童謡「りすりす小栗鼠」は、漢字に「杏^{あんず}の實^{みイ}が赤^{あか}いぞ」のような独特なルビが振られている。このルビにより音節、詩におけるリズム感を示し、ピッチ（音高）は読者の自由に任せられるような形で提示されていた。白秋は「無論童謡は歌ふ謡でなければなりません。尤も謡ふと言つても唱歌のやうに作曲された上^マで謡ふといふのでなく子供心の自然な発露から、とり／＼に自由に謡ひ出すといふ風なのが本当でせう。（『赤い鳥』1919年3月号）」と自らの童謡についての考えを示した。

しかし『赤い鳥』には創刊の翌月から、童謡への付曲と楽譜掲載を望む読者の声が続々と寄せられた。同誌主宰の鈴木三重吉は童謡の音楽化に舵を切り、1919（大正 8）年 5 月号に童謡《かなりや》（作詩・西城八十（1892-1970）、作曲・成田為三（1893-1945））が楽譜と共に掲載された。以降『赤い鳥』には毎月楽譜付きの童謡が掲載されることとなった。作曲家の参加により音楽の姿を得た童謡は、雑誌からレコード、ラジオ等発展するメディアにのり更なる人気を博した。それは童謡の始祖たる白秋の望む姿ではなかったが、童謡が一時の流行を越えてなお生き残る価値を与えることとなった。

2. 新美南吉と音楽としての童謡

南吉は 14 歳の頃より童話や童謡を様々な雑誌に投稿し、入選も多数果たしていた。南吉の代表作とされる「ごん狐」が、1932（昭和 7）年『赤い鳥』1月号に鈴木三重吉の朱筆を受けて掲載されたことは、よく知られている。その他、南吉の童謡 23 篇が、北原白秋の選

により『赤い鳥』に掲載された。南吉は『赤い鳥』に育てられた少年の1人である。

しかしその『赤い鳥』から誕生し流行した「音楽」としての童謡、楽譜をもつ童謡については、南吉が中学3、4年生の1年間を記録した『昭和四年自由日記』に、その音楽に触れた可能性を残す記述が1つあるのみであった。それは1月29日に書かれた日記で、友人に白秋の童謡集を借りたことが綴られている。

(前略) 梶田に借りた白秋の童謡集を讀むだ。そして、白秋に感服した。實は今まで、少々輕蔑してゐたのである。この一冊の集から、大に得るものが有つたのは嬉しい。集の中の、「雨がふります、雨がふる。云々」の童謡は、余が尋常三年の時、坂田聡香と云ふ先生に教はつたものである。懐しい。(後略)

白秋の童謡「雨」は、1918(大正7)年『赤い鳥』9月号が初出である。この童謡には弘田龍太郎(1892-1952)が付曲しており、楽譜は1919(大正8)年6月号の『赤い鳥』に掲載された。文中の坂田先生とは、『綴方帳』の「秋の虫」に指導の赤ペンを入れた教員である。南吉の記述から、坂田がこうした新しい童謡も生徒に教えていたことがわかる。しかし南吉が習った童謡「雨」が、詩の形であったのか、付曲された歌であったのかは不明である。

南吉の記述に付曲された音楽としての童謡がみられない理由は、当時まだ南吉の家にはラジオがなく、蓄音機も身近ではなかったことが考えられる。南吉が進学した半田中学校では唱歌の授業がなく⁸⁾、楽譜を読むことにも不慣れであったと思われる。そのような環境から見ても、南吉にとって童謡とは付曲された音楽としての童謡ではなく、詩として自ら創作し、また雑誌や書籍として届けられる文芸であったと考えられる。

しかし『昭和四年自由日記』には、この頃の南吉と音楽とを繋ぐ興味深い記述がある。

(前略) 宵、米を撞きに行く。其処で作曲を覚えたいと考ふ。(後略)

先述の日記の3日前、1月26日に書かれたものである。南吉が具体的にどのような曲を書きたいと考えたのかは記されていないが、日々童謡を書き綴っていた南吉が、自作の童謡のために作曲をできるようになりたいと考えた可能性はある。そうであれば、この記述は南吉が『赤い鳥』に掲載される童謡の楽譜に目を止める等、音楽化された童謡の存在を認識していたことを示唆する。童謡への付曲はのちに師と仰ぐ北原白秋の童謡観とは相容れないものであるが、この頃の南吉にとって白秋はまだ遠い存在であった。

3. 新美南吉と伝承童謡——「ワタクシノドウエウ」

(1) 「ワタクシノドウエウ」について

「ワタクシノドウエウ(ドウヨウ)」は、南吉が1930(昭和5)年3月から翌年5月まで

使用した創作ノートおよび日記である『文藝自由日記』に収められた、ほぼカタカナで書かれた文章である。末尾には「1930.11.27」の日付がみられ、南吉が中学5年生の冬に綴られたことがわかる。以下にその抜粋を掲載する。

ワタクシノドウエウ

ワタクシガ オサナイ 時ニ ワタクシノ ハ、カラ アルイハ ワタクシノ チサイ
トモダチカラ キイタ ドウエウヲ アツメマシタ。ワタクシハ コレラノ ドウエウ
ヲ ウタイ、 マタ キカサレテ オホキク ナツタノデ アリマス。ソノナカニハ ズ
ーツト ムカシカラ ツタワツテ キタ モノモ アリマセウ、又 ワタクシノ ハ、
ワタクシノ トモダチガ デタラメニ ツクツタノモ アリマセウ。カリニ ソレガ
デタラメニ ツクラレタ モノデ アツテモ、ワタクシハ ソノ ドウエウヲ ケイベ
ツシマセン。ソノ ドウエウモ ヤハリ ワタクシハ ウタツテ キタノデスカラ。
イマノ コドモたちハ ガツコウデ ヨイ ドウエウヲ オシエテ モラウノデ、コン
ナ ドウエウハ ウタハナイデス。ソレダケ コレラノ ドウエウハ ワタクシたちノ
ミノ ドウエウノヤウニ オモワレテ イツソウ ナツカシイノデス。

*

アメ

アメ コンコ ヤンドクレ

アシタ ノ パン ニ フツトクレ

註 “ヤンドクレ、ハ “ヤンデ オクレ、デス。オナジヤウニ “フツトクレ、 “フ
ツテオクレ、

アメノ シトシト フル アキノ ヨルニ シメツポイ キモチデ オウライヲ ミ
ナガラ ウタヒマシタ。街燈ノ トコロダケ アメノ フルノガ ミエマシタ。(以下略)

これに続き《キジ》《オーサム》《アノコ》《キツネ》《ヒヨメ》《チヨウ チヨウ》《ヨソム
ラノコドモ》《イチヤメ》《コンヤハ》の全10曲、南吉が幼い頃に親しんだ歌が、それぞれ
に註として解説を付けて紹介されている。ここに挙げられた10曲中9曲が、いわゆるわら
べうたに属する民俗歌謡である。

また南吉は「ワタクシノドウエウ」の他に、1930（昭和5）年3月から1931（昭和6）
年9月の間に書かれた創作ノートである『少年少女ダイアリー』にて「いたちいたち／たば
こおといた」「いま泣いただーれ／おぼくさんもらつてだーまつた」等、自分が遊び歌った
11曲のわらべうたを記録している。これは前後の記述から1931（昭和6）年の2月末頃に
書かれたと推測される。

南吉が記したわらべうたについて『愛知のわらべうた』（服部、1981）及び『半田のわらべうた』（服部、2002）と照らし合わせたところ、《キジ》《どんどの水》等に近い旋律を持つと思われる譜例が見つかった。いずれも4分の2拍子を基本とし、長二度音程と完全四度音程の組み合わせによる日本のわらべうたらしい旋律であった。また『やなべの歩み』（岩滑コミュニティ推進協議会、1985）における「南吉の「ワタクシノドウヨウ」」の節には、地域に伝わるこれらのわらべうたについての遊び方が記されている。《キジ》や《ヨソムラノコドモ》は喧嘩の折に歌われる曲であり、時にがなり合うようなものであっただろう。「ワタクシノドウエウ」に記された歌は、南吉の生活に密接に結びついた歌であった。

(2) 「ワタクシノドウエウ」にみられる北原白秋の影響

南吉が子どもの頃に歌ったわらべうたについて書き記したのは、北原白秋の童謡観に影響を受けたためと考えられる。白秋は「新興童謡と児童自由詩」（1932）において、以下のように論じている。

新しい日本の童謡は、根本を在来の日本の童謡に置く。日本風土、伝統、童心を忘れた小学唱歌との相違は、ここにあるのである。従つてまた、単に芸術的唱歌といふ見地のみより、新童謡の語義を定めようとする人々に、私は伍みせぬ。（中略）

私の童謡は幼年時代の私自身の体験から得たものが多い。

あゝ、郷愁！ 郷愁こそは人間本来の最も真純なる霊の愛着である。（中略）

童謡は童心童謡の歌謡である。但し歌謡は歌謡であつて、その為には調律を製斎し作曲の上より、若しくは児童本然の手拍子足拍子を以て歌ふべきものとする制作上の規約がある。（以下略）⁽⁷⁾

白秋のいう「在来の日本の童謡」とは、わらべうたのことである。白秋は在来のわらべうたの伝統の上に、新しい童謡を発展させようとしていた。『赤い鳥』ではわらべうたのことを各地童謡、地方童謡、または伝承童謡と呼び、新しく作られる創作童謡、新興童謡と区別していた。そして創刊当初より、各地に伝えられたわらべうたの歌詞を読者から募集しており、白秋はこうしたわらべうたを自身の童謡に取り入れてもいた。白秋は1918（大正7）年8月号の『赤い鳥』において「童謡は昔から子供がしぜんと歌ひ出したものは實にいゝのがあります。大人が子供のために作ったものは、どうも大人臭くていけません。思ひきり子供になつて簡単に歌ふことです」と、自らの考えを示している。

南吉の創作ノート『少年少女ダイアリー』には、「發刊のことば」と題された小文が残されている。『校定新美南吉全集』第10巻解説には「代用教員になった南吉が、自身の童謡を集めた小冊子、あるいは児童の自由詩を集めた小冊子を作ろうと意図したものと考えられる」とある。「發刊のことば」の中には、以下の記述がみられる。

(前略) 在來の童謡が卑俗であると云ふので、大正七八年頃から新興童謡運動が起り、この運動から、現在の多くの既成作家は生れ出たのであります。成程彼等は「卑俗」から脱出しました。彼等は藝術味の盛られたものを作りました。けれどそれは大人の作品でした。大人が、無理に「子供にばけて」うたつたものでした。また子供には分らないむつかしい大人の詩を童謡にしたものもありました。(以下略)

「發刊のこぼ」には、以下に示す 1928 (昭和 3) 年の『赤い鳥』通信欄に掲載された白秋の童謡評と重なる部分がみられる。「藝術の香氣を高く保ちたいといふことも、ともすると、そのため妙に作爲したり、臭味が出たり、ひねつたりする傾向になり易い(1月号)」、「ただ、いつもいふとほり、ともすると、兒童の生活感情を歌ふべき筈の童謡や童詩の境地を忘れがちになる傾向が目だつのは、あまりいいことではない。兒童を材料にただけのものではないのだ(10月号)」。「發刊のこぼ」が書かれたのは 1931 (昭和 6) 年 4 月 5 日「ワタクシノドウエウ」の約 3 か月後のことである。本稿で定めた南吉の少年時代からはわずかに外れるが、南吉のわらべうたに関する記述として関連があるため取り上げることとした。

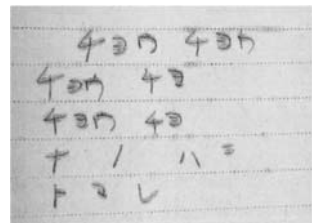
南吉が幼い頃に歌ったわらべうたを集中的に記したのは、1930 (昭和 5) 年の冬から 1931 (昭和 6) 年の春にかけてである。その年の 8 月より「正坊とクロ」「張紅倫」の童話 2 編、童謡 8 編が『赤い鳥』に掲載された。9 月には北原白秋門下による童謡雑誌『チチノキ』に参加、12 月には上京し兄弟子である巽聖歌の取りなしにより白秋との面会を果たしている。翌年 1 月には『赤い鳥』に「ごん狐」が掲載された。つまり、南吉がわらべうたについて書き記した時期とは、南吉の飛躍が始まる直前のことであった。南吉のわらべうたに関する記述とは、文学の道を模索する南吉が白秋に倣わんとした憧憬と修練の跡のようにも思われる。

(3) 「ワタクシノドウエウ」に記された唱歌《蝶々》

「ワタクシノドウエウ」には南吉が子どもの頃に親しんだ歌として 10 曲が挙げられ、そのうちの 9 曲が伝承童謡であるわらべうたであった。しかし 1 曲だけ唱歌《蝶々》が混じっていた。これについては、南吉直筆原稿の写真を基に考察を試みる。

チヨウ チヨウ
チヨウ チヨ
チヨウ チヨ
ナ ノ ハ ニ
ト マ レ

図 4:《チヨウ チヨウ》部分



(新美南吉記念館所蔵)

唱歌《蝶々》は1881（明治14）年刊行の『小學唱歌集』初編に収録された曲で、ハ長調4分の4拍子の曲である。今なお愛唱されるその旋律は、長らくスペイン民謡と伝えられていたが、現在ではドイツの古い童謡がその原曲と判明している。歌詞は1番が野村秋足（1819-1902）、2番は稲垣千穎（1845-1913）によるもので、南吉は1番の途中までを記している。しかし唱歌としては、南吉が使用した『尋常小學唱歌』には掲載されていない。

「ワタクシノドウエウ」において、在来のわらべうたの中になぜこの1曲が紛れ込んだのかは不明である。10曲中この曲にだけ註が付けられていないことから、南吉は後でこれを消すことを考えたかもしれない。しかし「ドウエウ」について綴る南吉の脳裏に「幼い頃の歌」として《蝶々》が浮かび、そのまま自然に記したと想定することはできよう。

南吉の直筆には、彼が歌うように旋律を思いながら書いたことがうかがわれる特徴が2点見てとれる。ひとつは、本来「ちょうちょう／ちょうちょう」と書かれる所が「チヨウ チヨ／チヨウ チヨ」と語尾が短縮され、子どもが歌うそのままのような書き方となっていること。もうひとつは「ナノハニ／トマレ」の部分が、その音価に合わせるように間を開けて書かれていることである。この旋律やリズムとの結びつきがうかがわれる書き方には、南吉が生来持つ音楽的な志向性が現れていると筆者は考える。そして専門外のことながら、その文学にも影響を与えるものではないだろうか。なお、こうした南吉の直筆にみられる音楽的反映については、今回の調査にて直筆資料を参照したことにより得た気づきである。今後の課題とし、調査検証を続けたい。

4. 本章のまとめ——新美南吉の少年時代における童謡観

以上、南吉によって1929（昭和4）年から1931（昭和6）年にかけて書かれた『昭和四年自由日記』『少年少女ダイアリー』『文藝自由日記』から、童謡に関する記述を辿ってきた。それを基に、南吉の少年時代における童謡観について以下にまとめる。

まず南吉にとって童謡とは、音楽ではなく文芸であった。それは南吉の記述に、作曲された音楽としての童謡について明確な言及が見られないことから明らかである。南吉にとって童謡とは、基本的に自ら創作する詩であった。しかし当時の童謡とは黙読するものではなく、読み手の「声」を伴うものであった。北原白秋の言葉にもあるとおり「童謡とは歌う謡」であり、読み手は詩として提示される童謡に自由に節を付けて歌い、朗吟した。南吉もまた、童謡を書くたびに自らそれを発声し謡ったと思われる。そのことを示唆する記述が『昭和四年自由日記』にみられる。以下に引用する。

西条八十の詩（現代詩集）を愛誦した。日夏^{アツ}歌之助の「夜の誦」は誦するに最も好い。

5月4日の日付を持つこの記述から、南吉は日頃から詩や童謡を誦していたと推測される。こうした南吉の文学における発声の意識は、この記述から12年後の1941（昭和16）年に

「早稲田大学新聞」に掲載された南吉の児童文学評論「童話に於ける物語性の喪失」で示された、声を出し読み聞かせることが持つ力の重要性にも繋がっていくように思われる。

また、南吉の童謡観には北原白秋からの多大な影響がみられた。在来のわらべうたに童謡の理想を置く白秋に倣うように、南吉は自身が幼い頃に歌ったわらべうたについての記述を複数残している。しかし、白秋は学校唱歌を批判し童謡への付曲に厳しく反対したが、年若い南吉の童謡観はまだ穏やかなものであった。「ワタクシノドウエウ」に1匹紛れ込んだ唱歌《蝶々》はそれを暗示している。そしてその直筆に見られる歌の旋律を想起させる反映には、南吉の持つ音楽的な志向性が表れている可能性があり、これは筆者にとり新たな研究課題となった。なお南吉の童謡観については、南吉の代用教員時代の記述もふくめ改めて検証する必要がある。これも今後の課題とし、調査を続けたい。

おわりに——唱歌、童謡から辿る児童文学者・新美南吉への道

本稿では1923（大正12）年から1931（昭和6）年、南吉が9歳から18歳の間に書かれた日記や創作ノートである『綴方帳』『昭和四年自由日記』『少年少女ダイアリー』『文藝自由日記』を手がかりとし、南吉の少年時代における唱歌や童謡、わらべうたとの関わりについて考察した。少年時代における南吉の「歌」にまつわる記述を辿ると、南吉が文学を愛好する少年から児童文学者へと成長していく過程が浮かび上がるように思われる。

小学校時代の作文帳である『綴方帳』には、南吉が唱歌を取り入れた作文が残されていた。唱歌《蟲のこゑ》の歌詞が用いられた作文「秋の虫」と、唱歌《春が来た》の改変された歌詞が取り入れられた作文「冬が来た」からは、南吉がこれらの作文を歌いつつ音読しつつ、音節やリズムを整えるように綴っていた様子がうかがわれた。これは、南吉の文学活動の出発点となる童謡創作に繋がる書法と考えられる。

次に、南吉の中学進学後に書かれた日記や創作ノートである『昭和四年自由日記』『少年少女ダイアリー』『文藝自由日記』を基に、南吉と童謡との関わりについて考察した。まず南吉にとっての童謡とは音楽ではなく文芸であった。そしてそれは、読み手の声を伴う謡われる文芸であった。日々童謡を書き綴り様々な雑誌へ盛んに投稿していた南吉は、日頃から童謡や詩を愛読していた様子が日記の記述からうかがわれた。これは小学校時代から引き続き、南吉にとって文学は黙読するだけではなく、発声し誦するものであったことを示している。やがて童謡の始祖たる北原白秋からの多大な影響が、南吉の記述にみられるようになる。白秋の童謡論に倣うように、南吉は自身が幼い頃に歌ったわらべうたについて綴った。その記述の後まもなく、南吉の童話や童謡が『赤い鳥』に多数掲載されるようになり、南吉の名は少しずつ世に知られ始めることとなる。南吉のわらべうたについての記述は、文学における南吉の飛躍が準備されたと考えられる時期に重なっていた。

そして以下私見ではあるが、南吉の唱歌及び童謡に関する記述からは、南吉の少年時代における歌に対する好感が伝わってきた。それは大人の芸術論とは無縁の、発声という体感を伴った歌謡である。少年時代の南吉が、唱歌、童謡、わらべうたを区別することなく緩やかに「童謡」と捉え、発声し歌う、また謡うものとして、愛しんでいた様相をみることができるように思う。

1930（昭和5）年3月、16歳の南吉は短い詩を書いた。

大人

子供の時の歌をだん／＼に忘れて行つてみんな忘れて了つた時が大人なのだ。

最後に、貴重な南吉直筆資料の閲覧を許可くださった新美南吉記念館に心より御礼申し上げます。

【注】

- (1) 別冊太陽日本のこころ 210『新美南吉』平凡社、2013年、見返り。
『赤い鳥』における童謡は、基本的に詩人の書いた詩に作曲家が曲を付ける形で音楽化された。
- (2) 旧制小学校の教科の1つ。南吉の小学校6年間の成績で判明している5年生まで、「綴方」の成績はすべて満点の「10」であった。
- (3) 『校定新美南吉全集』第10巻掲載の「秋の蟲」では旧字体「蟲」が使われているが、原本にある南吉の直筆は新字体の「虫」であった。よって本稿の引用では新字体を用いることとする。
- (4) 周東美材『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』岩波現代全書、2015年、244頁。
- (5) 唱歌ではないが、小学4年の時に書かれた作文「聯合運動會」では《君が代》の曲名がみられる。
- (6) 周東、前掲書、31頁。
- (7) 『校定新美南吉全集』別巻I「新美南吉年譜」27-123頁内に掲載の南吉の中学校時代の成績に唱歌の授業はない。なお旧制中学の授業科目「唱歌」が「音楽」と改められ必修科目となったのは、1931（昭和6）年1月に文部省より発令された「中学校令施行規則中改正」においてである。（松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』和泉書院、2011、276-277頁）
- (8) この文章の初出は1923（大正12）年刊行の『詩と音楽』であり、さらに1929（昭和4）年に刊行された白秋の童謡論集『緑の触覚』にも収められている。

【掲載画像】

図1,2：『尋常小學唱歌第三學年用』文部省（愛知県図書館所蔵）

図3：『綴方帳』原本、部分（新美南吉記念館所蔵）

図4：「ワタクシノドウエウ」写真資料、部分（新美南吉記念館所蔵）

【参考文献】

- 『校定新美南吉全集』第10巻「日記・ノートI」大日本図書、1981年。
- 『校定新美南吉全集』別巻I「新美南吉年譜」大日本図書、1983年。
- 『生誕百年 新美南吉』新美南吉記念館、2013年。
- 別冊太陽日本の心 210『新美南吉』平凡社、2013年。
- 『童謡誕生 100年記念誌 明日へ』日本童謡協会、銀の鈴社、2018年。
- 堀内敬三・井上武士『日本唱歌集』岩波文庫、1958年。
- 村松直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ 明治・大正・昭和初中期』和泉書院、2011年。
- 与田準一『日本童謡集』岩波文庫、1957年。
- 畑中圭一『日本の童謡 誕生から90年の歩み』平凡社、2007年。
- 山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』講談社選書メチエ、2008年。
- 細川周平『近代日本の音楽百年 黒船から終戦まで』第2巻、2020年。
- 周東美材『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』岩波現代全書、2015年。
- 周東美材「音楽化する童謡」『音夢』第12号、2018年、2-15頁。
- 周東美材「童謡は『音楽文化』だったのか—1920年代におけるメディアの変容と消費社会—」『幼児教育史研究』第15号、2020年、34-49頁。
- 周東美材「童謡のメディア論—近代日本における『声』の実践と変容—」『社会学評論』59巻2号、2008年、262-289頁。
- 周東美材「『赤い鳥』とわらべうた」音楽文化の創造(CMC)電子版 Vol.07 2019年4月25日発行
https://www.onbuso.or.jp/wp-content/wp-content/2021/02/07_akaitori.pdf、2022年10月15日。
- 『やなべの歩み』岩滑コミュニティ推進協議会、1985年。
- 服部勇次『愛知のわらべ歌』日本わらべ歌全集12、柳原書店、1981年。
- 服部雄二『愛知わらべ歌全集 4790曲』抜粋「半田のわらべ歌 50曲集」、2002年。
- 『赤い鳥』復刻版第1巻第1号～第3巻6号、第20巻第1号～第22巻第3号、ほるぷ出版、1979年。
- 『白秋全集』第20巻「詩文評論6」岩波書店、1986年。
- 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹『声の力 歌・語り・子ども』岩波現代文庫、2019年。